

主 題：地上で最も愛すべき場所②

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章15-16節

テーマ：あなたは教会を愛しているでしょうか？

今朝、皆さんと見ていきたいのはIテモテ3：15-16のみことばです。いよいよきょうをもって“霊的リーダーのあるべき姿”、このシリーズもおしまいです。今回を合わせて14回、私たちはIテモテ3章を通して、教会のリーダーである監督・執事の資格について、また最後には教会について学んできました。振り返ってみれば、今回のシリーズは個人的にも正直非常に難しく大変なものでした。シリーズが長かったからではありません。学んできた内容が多く、の厳しいチャレンジを自分自身にも与え、何度も心が責められることがありました。以前よりも自分のうちにある罪深さが見え、成長しなければならない弱さも数多く示されました。神様がいかに高い基準を教会のリーダーに求めているのか、そのことを考えれば考えるほど恐ろしくもなりました。しかし同時に、それほどまでに神様がご自身の教会を大切に扱っているということ、愛されているということを知れば知るほど、主に仕える者として、ますます霊的成熟を目指して歩んでいきたいという思いも強められましたし、また神様の教会に自分自身を捧げることがいかにすばらしくて、いかに感謝なことなのかということも改めて覚えることができました。いかに教会が愛すべきものなのかということを考えることができました。願わくば、皆さんにとっても同じであればと思っています。これまでに見てきたみことばが皆さんの心を吟味するチャレンジとなるだけでなく、神様と人々に仕えていきたいと、成熟した喜ばれる者へとさらに変わっていききたいという願いを強めるものだったでしょうか？あなたのうちに、神様や教会、兄弟姉妹に対する愛は増し加わったでしょうか？

### ○教会とは何か：教会の五つの姿

きょう学ぶのは、先週に引き続いて教会についてです。いま一度教会とは何なのか、いかに教会が私たちにとって重要で、愛すべきものなのかを一緒に考えていきたいと思えます。内容に入っていく前に、先週の復習も兼ねてみことばをお読みしたいと思います。

#### Iテモテ3：14-16

「:14 私は近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。

:15 それは、たとえ私が遅くなればあいいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。

:16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。

「キリストは肉において現われ、  
霊において義と宣言され、  
御使いたちに見られ、  
諸国民の間に宣べ伝えられ、  
世界中で信じられ、  
栄光のうちに上げられた。」

さて、前回考えたことを少し思い返してみてください。先週、私たちが覚えているべき五つの教会の姿のうちの三つを見ました。

#### 1. 教会はみことばに根差した行動が求められるもの 14-15 a 節

教会でなされるすべてのことは、聖書を基盤としていたのです。大衆の意見やそれぞれの持っている価値観、この世の考えが教会でなされることを決定するものではありませんでした。みことばこそが十分

であるからこそ、みことばこそが何もつけ足す必要がない完全なものであるからこそ、私たちはここでのみ立つのです。どんな状況にあらうと、みことばこそが私たちに必要な知恵や助けを与えることができるものでした。そんな揺るがぬ権威あるみことばを学んで、いつもそれを頼りに歩いていく。それが教会だったのです。

## 2. 教会は神の家族として仕え合うもの 15 b 節

かつてキリストから離れ、この世にあって望みなどいっさいなく歩んでいた私たちが、キリストの尊い犠牲によって同じ神様を愛する家族に加えられたのです。確かにそれぞれに違いはあります。互いに罪を犯して傷つけ合ってしまうこともあります。忍耐が問われるのです。しかし、同じキリストの血潮によって買い取られた者たちが、神様のすばらしさをわかち合いながら歩いていくことができるように変えられました。神様から与えられた賜物を用いて、ひとりひとりが兄弟姉妹の益のために仕えていくことができるようになったのです。もちろんこれまで I テモテ 3 章で見てきたように、霊的リーダー、監督や執事には特に大きな責任がありました。でもそれだけでなく、信仰者それぞれがほかのだれにもできない、あなただけにできる特別な方法で、神様から与えられた特別な役割を教会にあって担っていました。神の家族に必要な人はい人もいません。みなが仕え合い、ともに生きる、それが教会だったのです。

## 3. 教会は生ける神が所有するもの 15 c 節

教会の所有者は私たちでも、教会のリーダーでもありませんでした。教会はほかのだれでもない、神様のものだったのです。そしてこの所有者である神様は、力のない死んだ存在ではなく、確かに生きて人々のうちに働かれる偉大なお方でした。だからこそ私たちが罪によって惑わされて、そんな神様から離れていかないように兄弟姉妹は互いに励まし合って、戒め合いながら歩いていこうとするのでした。そうして私たちはともに集って、同じ神の家族として歩いていくのです。教会とは生ける神様が所有するものでした。

教会はこんなにもすばらしくて、こんなにも重要なものでした。だからこそ先週見たように、スポルジョンも「**教会は地上で最も愛すべき場所**」なのだと言ったのです。これから残された教会の二つの姿を一緒に見ていきたいと思えます。その姿を学びながら、今回も続けて自分自身にとって教会が一体どのようなものなのか、教会が自分にとって地上で最も愛すべき場所なのかを、ぜひそれぞれがよく考えてみてください。

## 4. 教会は真理を支える柱なるもの 15 d 節

ではもう一度 15 節を見てください。「それは、たとえ私が遅くなったばあいで、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」と書いてありました。最後に「その教会は、真理の柱また土台です」とありました。四つ目に教会の姿として描かれていたものは、教会は真理を支える柱となるものでした。

ここでまずパウロは、教会に「柱」という表現を用いていました。柱と聞いて、今の私たちには余りぴんと来ないかもしれませんが、当時のエペソに住む人々にとって、これは特別で重要な意味を持っていました。先週も言いましたけれども、エペソの町には古代世界の七不思議であるアルテミス神殿が存在していました。町に住む人々は、日々その神殿を目の当たりにしていたのです。この神殿に関して、ウィリアム・バークレー師はこのような表現をしています。「神殿の特色の一つはその柱であった。そこには一二七本の柱があり、それら一本一本が王の贈り物であった。そのすべては大理石でできており、あるものには宝石が散りばめられ、金で覆われているものもあった。エペソの人々は柱がどれほど美しいものであるかをよく知っていたのである。」と。神殿において、柱というのはどんな役割を持ったものでしょう？一つ目に言えることは、柱は神殿の飾りとして、その美しさや神殿全体、神殿そのものの壮大さを人々の前で明らかにするものでした。また同時に、柱はその神殿の屋根を支えるも

のでもありました。当然ながら、柱がなければ屋根を支えることができず、その神殿は崩れ去ってしまいます。神殿が倒れないようにするためには、それを支える柱が欠かせないのです。神殿の柱というのは、明らかにするもの、支えるものでした。

でも、パウロはここで教会が柱であるとだけ言っていませんでした。彼は教会が「柱また土台」であると言ったのです。この「土台」と訳されていることばは興味深いもので、これにはそのままの「土台」や「基盤」という意味と「防波堤」といった意味も含まれています。つまりその役割を考えてみれば、土台は神殿を下から堅く支えるものであり、同時に嵐や地震といったさまざまなものから建物が崩れてしまわないように守るものなのです。

さて、教会が真理の柱また土台であるというのがどういうことなのかをまとめるとこういふことで、教会というのは、神様から託されたその真理のすばらしさというものを、すべての人々の前で明らかにするだけでなく、その真理をしっかりと支え、守っていくということです。私たちはみな神様の真理をこの世にあって大胆にあかししていく責任を負っていると言っているのです。そのようにして神様の真理を人々の前で大胆に明らかにしようとしたら、そこにはもちろん困難というものがあります。真理を快く受け入れてくれない人がそのことばを拒絶したり、話していることをさえぎって否定されることもあるかもしれません。それでも教会は揺るがされることなく、どんな時も変わらずに聖書の教えている真理を、福音というものを語り続けていくことが求められていたのです。

またここで重要なのは、パウロは「教会自体が真理です」とか「教会が真理の源です」とは言っていなかったということです。言いかえると、私たちの責任というのは、私たちが勝手に新しく真理を生み出すということではないということです。私たちが何か新しく真理を勝手に作り出して、それを明らかにしなさい、そんなことは言われていませんでした。私たちの責任は、もうすでに明らかにされている真理を人々の前であかしし、それを守っていくということです。私たちにはもう真理が示されました。ここに記されているのです。みことばに記されたその真理を私たちが大胆に伝えていく。それが教会に与えられた重大な働きだったのです。これはパウロの時代もそうでしたし、当然、今の私たちにも同じ責任が与えられています。

これまでにも見てきたように、教会というのは確かに神の家族が集まって礼拝を捧げ、互いに仕え合って励まし合うことができます。困っている時はさまざまな形をもって祈り、励ますこともできますし、一緒にみことばを学んで、ともに霊的成長を目指していくこともできます。それはとてもすばらしいことだし、感謝なことです。でも教会というのは、ただそれだけのために存在しているのではないということです。教会というのは、私たちが出て行って、人々に福音やみことばを宣べ伝えることも求めています。ずっとうちのことだけを考えるのではなく、私たちが教会の外に出て行って、真理を大胆に宣べ伝える、それが神様から教会に求められていた重大な責任でした。イエス様も大命令として弟子たちにこう命じていました。マタイ28：19－20に「:19 あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」、また、パウロもいつもみことばを語って、人々を教え戒めていくことを同じように求めていました。Ⅱテモテ4：2－4「:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、:4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」と。神様ははっきりと私たちがみことばを宣べ伝えていくこと、真理をあかししていくことを求めていました。だとすれば、果たして私たちは時が良い時だけでなく、悪い時も、どんな時も変わらずに神様の真理をこの世にあってあかししているのでしょうか？キリストの福音を大胆に宣べ伝えるという働きに忠実に仕えているのでしょうか？

パウロは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、真理から耳をそむけ、空想話にそれていくような時代になりますと警告していました。周りを見渡してみれば、まさにそのような時代にますますなっているのです。人々は真理に耳を傾けようとも、関心を示そうともしません。神様に従うことよりも、自分のやりたいように、自分の幸せや満足を優先して生きています。絶対的な真理よりも、寛容な心をもって、いろいろな考え方を受け入れればいいのではないかという考え方も広がっています。また、聞かなければならないみことばの教えに心をとめることよりも、自分の聞きたいことだけを望むような教会も数多くなってきました。私たちがⅡテモテ4章のような箇所を見た時に、皆さんもすぐにこう思うかもしれません。「ほかの人はそうかもしれないけれども、私は、この点においては大丈夫です」と。だとすれば、よく考えてみてください。私たちは自分に都合の良いことを言ってほしいといった罪の性質を持っていたりするのです。だれかに間違っているとされたくない、だれかから正されるのが嫌です、いつも自分に同意してくれて、ただ優しく寄り添ってくれる人が欲しいです、そんな思いを私たちが心のうちに持っているがゆえに、時にだれかがやって来て、このようにみことばは教えていますよ、あなたのしていることは間違っているのではないですか？と言われるものなら、すぐに怒りや憤りを覚えたり、あの人は全然愛のない人だと決めつけて、その人から距離を取ろうとしたりするのです。こんなことばを聞いたことがありますか？もしくはこんなことを思ったことはありませんか？

「あの人のもとには行きたくありません」、「あの人のところに行けば、自分の聞きたくないこと、自分が指摘されたくない罪を言われることがわかっているから、私はあの人のところには行きたくありません」と。要するに、この人物は聞くべき真理を告げられることよりも、自分の聞きたいことを聞くことを願っているのです。そして結局、そんな人は自分に都合のいいことを言うために、自分に寄り添ってくれる人だけを集めようとするのです。だからこそ、皆さん覚えておくべきことがあります。それは、もし私たちが真理を語ってくれる人からいつも逃げ出して、罪や過ちを指摘してくれる人から距離を取ろうとしているのだとすれば、そんなあなたは自分自身を非常に危険な状態に置いている、もっと言えば、それは大きなプライド、罪だということです。

確かに真理というものを聞くのは時に厳しいものです。心が責められます。だからそのことをわかっている者は、神様に従うことよりも、自分自身を守ろうと、自分を一時的にでも満足させてくれることばを話してくれる人を求めるのです。そんなことばに耳を傾けようとするのです。ですから、私たちはいろいろなことに注意していなければいけません。私たちに問われていることは、何よりも真理を愛し、それに従って歩もうとしているかどうかです。これまで私たちが見てきたように、教会というものはこの世にあって真理をあかす、そんな柱なる存在でした。私たちは世の中であって、まだ主を知らない人たちに、まだみことばを知らない人たちに、これが真理だ、これが福音だとあかすのです。だからこそ、まずあかす前に自分自身がどのように真理を生きているのかが重要です。神様のことばにはっきりと示されていることを妥協するのではなく、それに根差して喜んで歩もうと、従っていかうとしているのでしょうか？たとえ、自分の肉が望まないことだったとしても、たとえ自分自身の心が、いや、それは聞きたくありません、それは見たくありませんと言ったとしても、示されていることが真理だとすれば、神様を愛するその思いから、そのことばに耳を傾けようとするのでしょうか？果たして私たちは真理に立ち続けようとしているのでしょうか？

また、自分自身が真理に立つだけではありません。同時に私たちはその真理を知った者として、その真理を生きている者として、まだそれを知らない人たちのところに出て行って、愛と忍耐をもって語っていくのです。私たちの家族や友人、また友人だけではなく、周りの人もそうです。私たちの周りを見渡してみれば、滅びへと向かって進んでいる人がたくさんいます。その人を愛する思いを持って、その人が必要としている救いを宣べ伝えようとしているのでしょうか？その人のために祈ろうとしているのでしょうか？みことばの真理をこの世にあってあかす、そんな大切な責任を私たちは神様から託されま

した。神様が私たちにその責任を託してくださったのです。真理を支える柱、これが四つ目の教会の姿でした。

## 5. 教会はイエス・キリストをほめたたえるもの 16節

そして最後、五つ目に教会の姿としてパウロが描いていたものは、教会はイエス・キリストをほめたたえるものだということでした。その内容をこれから考えていくのですけれども、その前に、ここまでみことばを見てきて、もしかしたらこのように感じている人もいるかもしれません。伝道することが大切なことは何度も聞いてきたからわかるし、神様から与えられた大きな責任だということもよく知っています。でも正直に言うと、それは難しいのです、福音を宣べ伝えたとしても、望むように受け入れてくれないかもしれないし、その応答はひどいものかもしれません。だから、自分の中に恐れがあるので、自分にはできませんと。また、きょうの内容だけでなく、このシリーズ全体を通していろいろなことを学んできましたけれども、そのことを振り返っても、こう思われている方もいるかもしれません。神様が求めておられる成熟した者の姿は、余りにも基準が高い。非難されるところがなく、自分を制し、慎み深く、温和で争わず、家庭をよく治め、教会外の人々にも評判の良い者でなくてはならない。確かにそれはわかるし、自分もそうやって霊的成熟を目指していきたいけれども、到底自分には無理ですと。神様と人々に仕える者として成長したいけれども、それにもいろいろな困難があります。本当はそういうふうに進んでいきたいけれども、できない自分が、なれない自分が悲しいと。もしそのように感じている方がいるのだとすれば、そんなあなたに欠かすことのできない、何よりも大切なことがあります。それは、私たちの愛するイエス・キリストを覚え続けるということです。

少し考えてみてください。私たちは今回、このIテモテの手紙を見てきました。この手紙を記したパウロほど苦しみや痛みを味わった者はいませんでした。むちや石で打たれ、難船して海上を漂い、勞し、苦しみ、眠れぬ夜を過ごすこともあれば、飢え、渴きを覚え、寒さに凍えているようなこともありました。人々から憎まれ、迫害され、辱めを受け苦しんだことも数え切れないほどありました。彼ほど自分にはもうできません、もう大変です、もう十分です、神様、限界ですと言ってもおかしくないような苦痛を味わった者はいませんでした。でもそんなパウロは働きをやめることがなかったのです。彼はいつもみことばを宣べ伝え、ただ語って終わりではなくて、自分自身も成熟したキリストに似た者になることを目指して走り続けていました。たとえ困難があろうとも、彼は自分のすべてをこの主のために、神様のために捧げていたのです。パウロは特別だと言うかもしれません。でも彼も私たちと同じ罪人のひとりでした。ではなぜ彼はそのように変わらず歩み続けることができたのでしょうか？それはほかの何物でもないキリストの愛を彼が知っていたからでした。キリストの愛が彼を力づけていたのです。

パウロはIIコリント5：14-15でこのように言っていました。「:14 というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいる（支配している）からです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。:15 また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と。彼はどんな時もこのキリストから目をそらすことがありませんでした。周りの人がどう思うのか、いろいろな思いによって心を騒がせるのではなくて、キリストがどんなお方なのか、この方が何をなされたのかを忘れることがなかったのです。彼もいろいろな誘惑や葛藤を経験しました。でも、彼の心をいつも力づけたものはキリストの愛でした。キリストの愛がすべてにおける彼の動機となるものだったのです。確かに難しいけれども、私たちが同じように成長を目指していこうとするのであれば、イエス・キリストを覚え続けることが大切です。

### ●ほめたたえられるべきキリスト：六つの特徴

そしてパウロは16節で、私たちが覚えているべきキリストの姿、私たちがほめたたえるべきキリストが一体どのようなお方なのか、六つの特徴を挙げてくれていました。私たちが賛美し、ほめたたえる

イエス・キリストがどのようなお方なのかをいま一度16節から考えてみましょう。16節「確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現れ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」」とありました。

#### a) キリストは肉において現れた方

一つ目の特徴は、キリストは肉において現れた方だということでした。言いかえれば、イエス・キリストは人としてこの地上に来られたお方だということです。私たちは来週、このイエス・キリストの誕生、そのすばらしい事実を覚えて祝うために、ともにクリスマス礼拝を持とうとしています。きょうここで特に考えてほしいことばは「肉において現れ」という、この「現れた」ということばです。イエス・キリストは現れたのです。この方は造られたものではありません。すべての初めからおられた永遠の神が人となって、人としての性質を持ってこの世に現れた、この世に来られたのです。ヨハネ1：1と14に「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。……ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とあります。この世界を造られた創造主なる神様がアルファでありオメガである万物の支配者が、王の王なる偉大な方がご自分をへりくだらせて人に仕える者としてこの世に現れたのです。

これは、いろいろなところでクリスマスに毎回聞くことです。でも、少し立ち止まってよく考えてみてください。イエス様が一体どれほどの犠牲を払われたのかということです。この方は王の王でした。この方こそ仕えられるべき存在でした。しかし、この方は王の王であるにも関わらず、馬小屋で生まれ、しかも飼い葉桶の中に寝かせられました。家畜の食べ物を入れる汚くて臭いそのような場所に、王の王が誕生されたのです。また、この方は神様でした。それにもかかわらず、もちろん罪は犯しませんでしたが、すべての点で私たちと同じようになられたのです。人として歩んで、疲れや飢え、渴きを覚え、この方は弱さを覚えられました。また貧しく、家や寝床すらなく、不当な扱いを受けて苦しみ、家族から拒まれただけでなく、愛する弟子たちからも見捨てられて、自分のもとから逃げてしまうこともありました。そして、最後には何よりも残酷で苦しい十字架につけられたのです。だれもこんな人生を進んで送りたいとは思わないでしょう。しかし、イエス様はこうやって自分自身をへりくだらせ、仕える者としてこの世に来られたのです。

どうしてそんなことをしたのでしょうか？なぜ主は自分を卑しくし、十字架の死にまでも従われたのでしょうか？それはこれが罪人に対して神様が示してくださった愛だからでした。ローマ5：8は「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と言っています。神様に逆らっていた私たち、罪人として自分自身の望むままを生きていた私たちには、自分で自分を救うことなど絶対にできませんでした。罪の中に死んでいた私たちは何もできず、ただ聖く正しい神の前に御怒りを積み上げることしかできなかったのです。愚か者として永遠のさばきへと、滅びへとただ向かっていました。私たちのうちには希望などなかったのです。なぜなら、私たちはどんなことをしたとしても、神様の怒りをなだめることはできませんでした。しかし、そんな私たちを救うために、キリストがまず愛を示してくださったのです。私たちが愛を示したのではなく、まずキリストが私たちに愛を示してくださいました。そして、この方が私たちの代わりに罪を背負って十字架にかかり、神の怒りを耐え忍んでくださったからこそ、その血潮でもって罪を洗い流してくださったからこそ、今、私たちはキリストにあって、この方を信じる者に救いが与えられるというその約束の上に立つことができるのです。キリストは、私たちに理解できないほどの非常に大きな犠牲を払って、救いを成し遂げてくださいました。果たして私たちはこのキリストの犠牲を日々どれほど覚えて歩んでいるのでしょうか？こんなにもすばらしい救いを成し遂げてくださった

お方を私たちはどのように模範として歩んでいるでしょうか？一体どれほどの感謝を持って日々を歩んでいるでしょうか？これが一つ目のことでした。

#### **b) キリストは霊において義と宣言された方**

二つ目の特徴として挙げられていたことは、キリストは霊において義と宣言された方だということです。別のことばで言うのであれば、キリストは御霊によって、その正しさを立証されたということです。霊において義と宣言されるというのは一体何を言っているのでしょうか？そのことに関してパウロはこのように教えてくれています。ローマ 1 : 3 - 4 に「:3 御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」とあります。少し思い返してみてください。イエス様は人となってこの地上に来られ、人々の間に住まわれました。住まわれている間、イエス様はさまざまな良い働き、すばらしいことを人々の前でなされました。奇跡も行われました。でも最終的に、人々はそんなイエス様を受け入れず、殺したのです。自分は神の御子であると語られたイエス様のことばなど信じようともせず、拳句、この方を犯罪人として扱い、十字架につけました。この世は救い主として来られたキリストを罪人として侮辱し、罵倒しました。しかし御霊はこの方を正しいと宣言したのです。「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により」、神の御子だと公に示されたパウロは言っていました。つまりキリストはただ死んで終わりではなかったということです。その死から御霊の力によってよみがえることを通して、ご自身が真の神の御子であることを公に証明されました。復活を通して、人々が言っていたことが間違っていたこと、そして何よりもご自身がただの人間ではない、罪のいっさいない、生きた聖い神様であることを立証されたのです。この方は神様だということを復活を通して明らかにされました。

もしキリストが復活されていなかったとしたら、私たちは今もまだ罪の中にいて、そこではいっさいの希望などありませんでした。しかし、この方が約束されたとおりに死からよみがえり、そしてその復活を覚える時に、私たちは確かにこの方は約束を守られるお方だ、死に勝利された生ける神なのだと信頼して歩むことができるのです。イエス・キリストは十字架にかかり、死なれただけではなく、復活されて今も生きている、そんなすばらしい神様なのだ、それがほめたたえられるべき二つ目の姿でした。

#### **c) キリストは御使いたちに見られた方**

三つ目の特徴として挙げられていたことは、キリストは御使いたちに見られた方だということでした。これが何を意味するのかを理解する上で、キリストの生涯をいま一度振り返って見てください。御使いというのは、イエス様の人生に密接に関係する存在でした。例えばマリヤのもとに現れて、怖がることはない、あなたは身ごもって男の子を生みますと、キリストの誕生を伝えたのはだれでした？それは御使いでした。羊の群れを見守っていた羊飼いののもとに現れ、恐れることはありません、きょうダビデの町であなた方のために救い主がお生まれになりましたと伝えたのはだれでした？それも御使いでした。悪魔の試みを受けて、それに勝利された後、イエス様のもとにやって来て、この方に仕えたのはだれだったか覚えていますか？マタイ 4 : 11 に「すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。」とありました。これも御使いでした。イエス様が捕らえられる前、ゲッセマネで苦しみもたえながら、御心ならばこの杯を取りのけてくださいと祈られていた時、イエス様を力づけたのはだれだか覚えていますか？ルカ 22 : 42 - 43 に「:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」:43 すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。」とありました。これも御使いでした。また、空っぽの墓を目にしたマリヤたちのもとに現れ、ここにはおられません、よみがえられたのですと、キリストの復活を伝えたのはだれでした？それも御使いでした。そして最後にもう一つだけ、キリストが天に上られた時、天を見つめる弟子たちのもとに現れ、なぜ天を見上げて立っているのですかと語りかけたのはだれでした？もう言うまでもないですよ？それも御使いだったのです。

このようにして、キリストの生涯を振り返って見れば、そこには御使いたちが、大きく関わっていました。彼らはイエス様がどんなお方なのかを最初から最後まで目の当たりにしていたのです。そして、そんな偉大な救い主、神の御子の力を目にした天使たちは、今もなおこのイエス・キリストを天で絶え間なくほめたたえているのです。御使いたちはイエス・キリストを見ました。そして彼らはその応答として、ほめ歌を歌い続けているのです。キリストは御使いたちによってもあがめられる存在でした。

#### **d) キリストは諸国民の間に宣べ伝えられた方**

でもそれで終わりではありません。次に四つ目の特徴として挙げられていたことは、キリストは諸国民の間に宣べ伝えられた方だということでした。キリストがどのようなお方なのか？何を成し遂げられたお方なのか？そのことを目撃したのは、何も御使いたちだけではありませんでした。イエス様がどのようなお方のかを一番近くで見っていたのは、キリストの弟子たちでした。だからこそ、イエス様はご自身が天に上られる前に、地上に残される彼らに向かってこう告げたのです。使徒1：8で「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」、イエス様は弟子たちに自分の証人になることを求めていました。そしてそのことばどおり、彼らは出て行ってキリストを地の果てにまで伝えたのです。

弟子たちはそのような働きをしました。もちろんパウロもそのひとりでした。彼の宣教旅行を思い出してみてください。彼はまだ福音の届いていない人々のところに出て行って、喜んで伝道していました。テサロニケやピリピ、コリント、最後にローマに至るまで彼はあらゆる場所に出て行って、救いのメッセージを伝え続けていたのです。キリストの弟子たちは出て行って、みことばを語り続けていました。そしてこれはその当時で終わったのではなく、今の時代も変わることはありません。私たちも十字架につけられたイエス・キリストを宣べ伝えていくのです。諸国民の間でキリストは宣べ伝えられていくべき素晴らしいお方なのです。

#### **e) キリストは世界じゅうで信じられた方**

でもキリストは人々の間で、ただ宣べ伝えられて終わりではありませんでした。だから五つ目の特徴として、キリストは世界中で信じられた方と書いてありました。今見たように、キリストの福音は、弟子たちによって、世界中のあらゆるところで語られたのです。そして、語られたみことばを聞いた人たちの中で、イエス・キリストを自分自身の救い主として信じ、受け入れた者たちが現れました。キリストの福音にはえこひいきというものはありませんでした。ユダヤ人だろうが、ギリシャ人であろうが、福音というものは信じるすべての人に救いを得させる神の力でした。パウロもローマ10：9-10で「：9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。：10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」と言っています。救いはイエスを主と口で告白し、信じる者に神様が与えてくださるものでした。私たちの行いがその人を救うものではありません。私たちが何かをしたから、それによって義と認められるものではありません。罪人が義と認められるのはただ信仰によるのです。ですから、福音を聞いた時に、福音に対する正しい応答というのは、その福音を素直に信じることです。なぜキリストの福音が素晴らしいのかというと、それはこの福音が私たちには決してできないことを成し遂げてくださったからでした。

私たちはどれだけ良い行いをしたとしても、神様の完全な基準を満たすことなどできませんでした。もし行いが必要だとしたら、だれひとりとして救いに預かることはできませんでした。しかし、キリストのうちに救いがあり、この方を心から信じ受け入れる者には神様がその救いを恵みとして与えて下さると約束してくださったのです。行いではなく、信仰によって、恵みによって、キリストによって私たちは救われると。



## f) キリストは栄光のうちに上げられた方

そして最後六つ目の特徴として挙げられていたことは、キリストは栄光のうちに上げられた方でした。キリストは十字架にかかってそれで終わりではなく、その死から復活し、救いのみわざを成し遂げ、そして天に上られました。そして栄光を受けて、今もなお神の右の座についておられるのです。ヘブルの著者もヘブル1:3で「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」と述べていました。ここでは大切なことがいろいろとされています。その一つに、「御子は……罪のきよめを成し遂げて……大能者の右の座に着かれました」とありました。言い換えれば、キリストはもうすでに救いのためになすべきことをすべて終わられているということです。完全に終わられているということです。今さら何かをつけ足す必要はないのです。まして私たちがその救いに何かを付け足すこと、付け加えることなど絶対にできません。主イエスはその働きを完全に終えて右の座に座られているのです。救いのみわざはもう完成したのです。だからこそ、私たちがその事実を覚えてキリストを見上げる時に、この方のうちにあって、罪はもう赦されていると確信を持つことができるのです。この方を信じる者は、もう罪に定められることはない。こうして私たちはただイエス・キリストにあって、揺るがぬ希望を持って歩いていくことができるのです。私たちのうちに何かがあるのではありません。ただ、すばらしい救い主として犠牲を払って来てくださったイエス・キリストのうちにのみ、私たちの救いがあるのです。

六つのことを見てきましたけれども、これが私たちの救い主でした。肉において現れ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられたこの方。この方こそが私たちを罪から救い出してくださったあわれみ深く偉大な救い主でした。こんな方がおられるのです。この真理を見た時に、私たちの心を支配しているのはどんな思いでしょうか？このすばらしい救い主に対する賛美でしょうか？それともそれ以外の何かでしょうか？パウロは良い時も悪い時も、たとえどれほどの試練があろうとも、見るべきところから目をそらすことはありませんでした。彼はいつもイエス・キリストがどんなお方なのかに心をとめ、この方の愛を、この方の赦しを覚え続けていたのです。私たちも同じです。どんな時もキリストの姿に目を向け続けることです。この方の助けがなければ私たちは何一つできません。だからこそ、助けを与えてくださるこの方に祈り求めることです。助けを与えることができるこのお方に、私たちは信頼して歩み続けることです。そして、この方を愛するその愛を動機として、ますますキリストに似た者へと変わり続けていくことです。

### ○まとめ

さて、きょう、私たちは私たちが覚えておくべき教会の五つの姿のすべてをパウロのことばから見てきました。それを踏まえて、改めてあなたにとって教会は地上で最も愛すべき場所でしょうか？教会はただの建物ではありませんでした。教会はどんな時も必要な助けを与えることのできるみことばに根差したものであり、教会は生ける神の家族として、兄弟姉妹が互いに励まし合ったり、祈り合ったり、仕え合ったり、罪に陥らないように戒め合って生きていくようなものでした。教会は真理の柱として、この世にあって、福音を大胆に宣べ伝えるという大切な働きを神様から与えられているようなものでした。そして教会は何よりも、偉大な救い主イエス・キリストを、同じように罪赦された者たちがともに集ってほめたたえることができるものでした。

私たちはそんな神の家族である教会に、神様によって加えられたのです。確かにその中で歩いていこうとすれば、そこには難しさや試練というものも多々あるでしょう。神様が求めておられる基準を見れば見るほど、変わらずにそれが高いものだと思わなくてはなりません。神様と人との仕えようとして成長していこうとすれば、そこにはいろいろな困難も出てくるでしょう。自分自身の罪だけでなく、兄弟姉妹の罪とも向き合わなければいけない場面も多々出てくるでしょう。でも、皆さん、私たちは神の家族として

生きているのです。私たちはひとりではありません。同じように主を愛し、同じように主に赦され、同じように霊的成熟を目指す兄弟姉妹とともに歩いていくことができます。また、私たちには私たちが必要な知恵がすべて記されたこのみことばを頼りに歩いていくことができます。そしてそれ以上に、今も生きていて、教会の所有者であり、教会のかしらであられるイエス・キリストが私たちとともに歩んでくださると、確信を持って生きていくことができるのです。私たちに必要な助けはこのイエス・キリストから来ます。私たちを決して離れずに、私たちを決して捨てないと、そう約束してくださったイエス・キリストがおられるのです。だから、私たちはそこに目をとめ続けて歩いていくことです。ここに私たちの本当の満足が、本当の喜びがあります。

もし、まだイエス・キリストを知らないという方がおられるのであれば、一つ言えることは、このイエス・キリストのうちにしか本当の喜びも、本当の満足も決してないということです。今、あなたはいろいろなところを見て、この世の中でそれを探そうとしているかもしれませんが、このイエス・キリストのみがあなたに本当の救いを与えることができるお方です。ですから、この方の前に出てきて、罪を悔い改めて、これまでしてきたことを神様の前に悔い改めて、この方を主として、救い主として受け入れて、信じ歩む人生をきょうから始めてください。

主を愛して、主のために生きていこうとされている皆さん、私たちに必要なものは与えられています。だとすれば、それぞれ教会であろうとも、家庭にであろうとも、神様から与えられたその責任を果たしていくことです。私たちは霊的成熟の資格を見ました。でも、これは霊的リーダーだけに問われていたことではありませんでした。みなそれぞれ置かれた場所にあって、みことばに従い、キリストに似た者へと変わっていくのです。助けはあります。兄弟姉妹がいるし、みことばがあるし、何よりもイエス・キリストが、御霊なる神様がいます。ですから、ともに主に喜ばれる者として変わり続けていきましょう。このシリーズは終わりますが、ここからがスタートです。祈りつつ、励まし合いながらともに歩いていきましょう。